

隨泉寺寺報

平成20年(2008年)6月号 第454号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

前期門信徒講座

講師 小野田市須恵西 正教寺住職

姫路 香紀師

講題 『お念仏の人生とは』

『如来さんの家においてもろうて おりますけえな』

善太郎

妙好人 石見の善太郎

天明2年(1782)10月、現在の島根県浜田市下有福町の農家に生まれる。江津市千田町浄光寺の門徒である。善太郎30~41才の間に、愛児4人を次々と失うという深い悲しみに出会う。そのことが機縁となり、40代半ば頃よりいのちがけで法を求める。近郷近在の諸師のお育てにより、仏法に照らされて生きる、念仏者「この善太郎」としての新しい人生が始まる。

ある人が、善太郎同行に会いたくて道ばたの人に家を尋ねると、本人でした。答えて、「わしば家をもっておりません」。合点がいかず「借家住まいか」と聞くと、こう答えました。火宅無常の世界を痛感する時、この言葉は深く胸に響きます。また、「つれは如来さん」とも言いました。

6月の法座予定

- 6月 8日 掃除 長者原東
- 6月14日 昼席午後1時より 前期門信徒講座
- 6月14日 夜席午後7時より 出張法座 長者原東 椿谷氏宅
- 6月15日 朝席午前10時より お父さんの集い おとき
- 6月15日 昼席午後1時より 前期門信徒講座
- 7月 2日 午後6時より 門信徒会本部役員会

☆お父さんの集い6月15日朝席(午前10時より)

6月15日(日)は父の日です。

父の日

6月の第3日曜日。恥ずかしがらず感謝の気持ちを伝えましょう。一家の大黒柱として、日々頑張っているお父さんに家族がねぎらいの気持ちをこめてプレゼントをしたり、肩をもんだりしてますか?父の日に感謝の言葉やねぎらいの言葉をかけてあげましょう。

父の日のいわれ

母の日があって父の日がないのはおかしいということで、アメリカの一夫人が男手一つで育ててくれたお父さんに感謝するパーティーを開いたのが始まりです。その後1934年に父の日委員会が結成され、母の日にならって6月の第3日曜を父の日に制定しました。

日本で一般的な行事になったのは昭和28年(1953年)から。

母の日のカーネーションに対して父の日のシンボルは白いバラとされています。でも特に決まりはありません。日頃一生懸命働いてくれているお父さんに感謝して、プレゼントを贈ったり家族で食卓を囲んで過ごしてみましよう。

お父さんの集い

今自殺が増えています。一年間に3万人を超える人が自ら命を断っています。

それも40代から60代までの働き盛りのお父さんが多いようです。なぜ男の人のそれも働き盛りの人が多いのでしょうか。原因は色々言われていますが、結局は本当の拠り所を持っていないということなのでしょう。死にたいほどの悲しみ、苦しみは、人生生きて行く中でどうしても出会います。そのとき昔はいろいろなものが支えてくれました。家族や、地域社会や、そして確かなよりどころでした。家族の中で一番中心だと思っているお父さんは誰にも頼ることが出来ず、独り悩んでそして、.....。

今こそ私を支えてくれる確かなものに出会うときです。そのために仏様がおられます。本願があります。念仏があります。

この頃お寺にお参りしてくださる人の中に、男の人の姿がめっきり少なくなっていました。決まった人がいつも3~4名です。一人ではなかなか本堂に入りづらいのでしょうか。誘い合わせて門をくぐってください。お母さん方も一緒に参ってください。

☆御礼

永代経懇志 金 拾萬円 住田 茂殿 故 住田 末登様 特 永代経志として
永代経懇志 金 拾萬円 大山 弘子殿 故 大山 松雪様 特 永代経志として

☆御礼

門信徒会へ 金 一封 住田 茂殿 故 住田 末登様 香典返しとして
門信徒会へ 金 一封 大山 弘子殿 故 大山 松雪様 香典返しとして



「あたりまえ」の素晴らしさの见えない人は「目をあけて眠っている人」

隣の町のお寺の門前の掲示板に、「目をあけて眠っている人の目を覚ますのは、なかなかむずかしい」と書いてありました。「目をあけて眠っている人」というのは私のことではないかと思うのといっしょに、性腫瘍のため亡くなられた若き医師、井村和清先生が飛鳥ちゃんというお子さんと、まだ奥さまのお腹の中にいらっしやるお子さんのために書き遺された『飛鳥へ、そしてまだ見 子へ』（祥伝社刊）というご本のことを思い出しました。



その中に「あたりまえ」という、井村先生が亡くなられる二十日前に書かれた詩があります。『あたりまえ』

【こんなすばらしいことを、みんなはなぜよろこばないのでしょう
あたりまえであることを
お父さんがいる お母さんがいる 手が二本あって、足が二本ある
行きたいところへ自分で歩いてゆける 手をのばせばなんでもとれる
音がきこえて声がでる こんなしあわせはあるでしょうか
しかし、だれもそれをよろこばない あたりまえだ、と笑ってすます
食事がたべられる 夜になるとちゃんと眠れ、そして又朝がくる
空気をむねいっばいすえる 笑える、泣ける、叫ぶこともできる 走りまわれる
みんなあたりまえのこと こんなすばらしいことを、みんなは決してよろこばない
そのありがたさを知っているのは、それを失くした人たちだけ
なぜでしょう あたりまえ】

井村 和清

「それなくしては、しあわせなど成り立ちようのない大切なこと」「あたりまえ」のすばらしさの见えない人、そういう人を「目をあけて眠っている人」というのだと思いました。そして、私も、その中の一人だと気づかせていただきました。

母の百ヶ日法要に思う！ 植木嗣夫 記

母の百ヶ日法要を先 4月17日随泉寺住職様にお参り頂いて済ませた際感じた思いを記述してみたいと思います。先ず感じた事は、“もう百日経ったのか”と正直思いました。90才前後の当時老健施設にデイサービスでお世話になっていた頃、傍から見て、本人は何時までも元気で長生きする一策として、人々との輪に入って交流出来る事を大変喜んで楽しく積極的に所していました。

年老いる前は随泉寺仏教婦人会活動も積極的に活動していたと皆さんからよく聞かされました。地元ではカラオケ同好会等で皆様に良くして頂いたものです。

その間皆様にはご迷惑をお掛けしたり、多大なご協力を頂いた事この場をお借りして改めてお礼申し上げます。ありがとうございます御座いました。

私の記憶としては、幼年期から青年期の思い出と熟年期の思い出の二時期が母の思い出として強く残っています。(就職の関係で壮年期30年間東京生活であった為)幼年期6才の時父(岩夫)が兵役召集で出征し、祖父、祖母、母に育てられました。当時は勿論戦中教育一色でしたが、どこの家庭とも同様に母の言葉で強く残っているのは「素直」で「正直」な人間に育ってくれと良く言われました。また「世間の役に立つ人間」になってくれとも口癖の様に躰けられた事を思い出します。子供の頃は、年寄世帯で育った為 朝晩必ず仏壇にお参りするのが、習慣になっていました。うっかりお参りを忘れて食卓に座ると“仏さんに参ったか”と注意されてものです。

戦時下の大変厳しい時期 父の留守を祖父、祖母、母とで守り小生と妹を育ててくれた親の愛情、恩は、何よりも勝り 尊いと思い、今更ながら感謝の気持ちで一杯です。戦後父復員後の弟妹二人と合わせて四人の子をしっかり育て上げてくれた親の恩に対し遅まきながら今になって手を合わせ合掌の日々です。

熟年期運良く郷里に帰る事が出来て一緒に生活をする事になった時も良く世話をしてくれました。当時単身赴任で帰広していた為、会社からの帰宅が遅くなっても食事の用意をして寝ないで待っていてくれたものです。“早く寝ていてよ…”と言うと“親だから寝られないのよー”と言って受け入れてくれませんでした。

私としては、“反って仕事に打ち込めない”とクレームを言った事もありました。

父母共に長寿でいてくれる自分達は幸せ者と喜ぶ反 入院をした時は、その毎日の介護の大変さを愚痴ったりする人間の我侷が出て反省もしたものです。

妻の助けを借りて二人三脚で何とか乗り越えて来たこの4～5年でした。私は、突然の病による後遺症の身体を悔いながら地域の心ある親切な方々に助けられての感謝の日々です。

これからは年老いた父の世話をしながら 妻と共に助け合いながら 生かされている私達の道をしっかりと生きていと念じています。親鸞聖人七百五十回大遠忌の年にお浄土に旅立ったのも何かのご縁だと思っています。仏教心を深く持ち“安心”して、やがて来る人生の終焉を迎えたいと念じています。

合掌

植木サツエ 慈摂院釋尼善徳 平成20年1月9日往生 95歳

